

目指すものは神の一手  
のみ

蠹霸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

s a iの復活?!

ヒカルの碁

s  
a  
i

目  
次

1



## S a i

カメラのシャッター音が鳴り響く。

「進藤本因坊！本因坊おめでとうございます！」

「ありがとうございます。」

俺は桑原のじーさんを倒し、本因坊になった。

23歳。最年少記録だ。

質問が飛び交う中、

「何か伝えたいことはありますか？」

又、誰に伝えたいですか？」

「…そうですね。『お前のおかげだ。ありがとうございます。』と

師匠…というより、俺に碁を教えてくれた人に。」

く控え室く

驚きが走った。

「な…っ」

「進藤くんは師はいなかったはずじゃないでしょうか？」

「ああ、確かに俺はあいつの師匠なのかもしれないが、碁は教えてない。」  
森下九段が言い放つ。

「じゃあ、師匠がいたのに、それを隠していた…と?」

「これは重大な事だ。」

「いや、進藤はそんなことはしないやつだが…」

全く同じ事が会見でも質問されていた。

「でも、進藤本因坊には、師匠はいなかったと聞いておりますが。」

「あ。そっか…やつちまった」

「やつちまったとは?」

控え室では誰が師匠なのかという声、

これはやばいだろという声。

「このことは個別に記者会見をさせてもらってよろしいでしょうか

とてもとても重要なことなので。」

「では、これにて会見を終了させて頂きます。」

「ちよつと!進藤本因坊!」

「何かあるんですか？」

「待つてくださいい！」

く控え室く

控え室にヒカルが帰ってきた。

「進藤！今のはどういうことなんだ！」

「説明してもらおうか！」

「…塔矢先生。」

「…あのことだろうか？」

「はい。」

塔矢先生は知っていて他の人は知らないこと…？

アキラと緒方はすぐに察したようだった。

「会見の費用は私が用意しよう。」

「ありがとうございます。後、呼ぶのは囲碁関係だけで。普通のテレビは断ってください。」

「分かっている。」

## 2週間後

2週間前と同じ部屋に全く同じ服でヒカルは登場した。

登場と同時にシャツターが切られる。

控え室は数個用意され、ヒカルをよく知る棋士達が集まった。

会見の質問はたった1つ。

「2週間前言っていた師匠の話について詳しくお聞かせ下さい。」

「はい。」

少し長くなりますが聞いてください。(ここは読んでも読まなくてもいいですが、読



んでおいた方がその後が読みやすくなります。）

平安時代。2人の帝（みかど）の囲碁の指南役がいました。

1人はある日、指南役は1人で充分。対局をしてどちらか勝った方が

そのまま指南役をして、もう1人は都から追い出すという案を出しました。

結果は提案をした方が勝ち、もう1人は負け、都から追い出され、

その数日後、入水しました。

しかし、そいつの囲碁を打ちたい気持ちは変わることなく、何百年たつても衰えることとはありませんでした。

そして、江戸時代。幽霊になったそいつはある1人の少年に

憑きました。その名を本因坊秀策と言います。秀策は、そいつが指定した

場所に碁を打ち、その後、伝説と化しました。でも、秀策は流行病で亡くなってしまいます。

取り憑くやつがいなくなった幽霊は又、何百年か碁盤の中に住んでいました。

そして数年前、小6の私は、祖父の蔵の中にある碁盤を見つけました。

その碁盤には血の跡がありました。しかし、一緒に来た友達は見えないと言います。

その血の跡は秀策のでした。私に取り憑いた幽霊は

現代で力をつけていきます。私も力をつけていきました。

もちろん、私が今までやってきた手合い、試験は私自身がやっています。

そして、中学生の時、5月5日そいつは姿を消しました。

私は成仏したと思っっています。以上です。質問はありませんか？」

「はい、その幽霊の名前は？」

「藤原佐為。かつて、ネット碁に現れたs a iです。」

「以上で会見を終了させて頂きます。」

ヒカルが控え室に行くとき緒方さんが、

「進藤！あれは本当なのか!？」

「緒方さん、本当です多分。越智くんには前に見せたけど…碁盤ある？」

アキラが「あの」1局を並べる。

「この一手は…」

「ここで僕が投了です。」

「こんな碁を…」

「筋は古く、隙があるように見えるが、そこを着く前にやられてしまう…」

緒方さんや森下先生含めそこにいた人達はs a iの存在を信じた。